

中高生のアイデンティティ形成および 生徒・進路指導に潜むトータリティ

Problem of totality on identity formation or student and career guidance

三好 昭子

はじめに

Erikson (1950/1977, 1959/2011) は人間の生涯発達を 8 つの心理社会的発達段階にわけ、自我発達を理論化した。各段階において自我が重要な関係 (第Ⅰ段階から順に、母親的人物、親的人物、基本家族、近隣・学校、仲間・外集団、友情・性愛などにおけるパートナー、労働と家庭、人類・種族) との出会いを経験することによって危機を迎え、その葛藤を「～対～」のかたちで漸成発達理論図の対角線上に位置づけている。そしてアイデンティティ確立対アイデンティティ拡散 (identity VS identity diffusion) を第Ⅴ段階青年期の主題として中心に据えている。Erikson はアイデンティティの感覚について「＜自分自身の内部の斉一性と連続性 (心理学的な意味における自我) を維持する能力＞が＜他人にとってのその人がもつ意味の斉一性と連続性＞と調和するという確信から発生する」(Erikson, 1959/2011, p96) としている。言い換えるとアイデンティティの感覚とは、「自分で思っている私 (自分が果たしている社会的役割、職業、家族の中の役割、団体のメンバーであること) が他の人からそう思われている実感、自信」(大野, 2010, p39) であり、社会の中で自分が～であるということについての「自覚、

自信、自尊心 (誇り、プライド)、責任感、使命感、生きがい感」の総称だといえる (大野, 2010)。このアイデンティティについて、もっとも関心が高まるのが青年期である。

児童期の後半から中高生になってくると、いったい自分は何者であるのかといった抽象的な思考が可能になる。また身体的な成熟が急速に進む中で、友だちにおける自分、家族における自分、学校における自分、そして地域社会における自分など、過去から現在につながる様々な自分の役割が未来や社会に対して問い直される。したがって中高生の生徒指導・進路指導において、アイデンティティ形成の問題は、単に本人の問題に留まらず、友人関係、親子関係、生徒-教師関係、さらには民族・国家まで含み込んだ地域社会との相互作用の問題として大きくとらえていく必要がある。また同時に、時間的にも現時点に留まらず、過去から未来へと開かれたタイムスパンで自分自身をとらえられるよう中高生をサポートし、将来のキャリア選択やライフデザインを含めた生徒・進路指導を行っていかねばならない。そのためには、教員自身もアイデンティティ概念を深く理解しておくことが必要だといえる。

そこで本論文では、アイデンティティ概念を

理解する上で鍵となるホールネス (wholeness) とトータリティ (totality) という観点から, (a) 友人関係, (b) 親子関係, (c) 生徒—教師関係を中心に, 中高生のアイデンティティ形成および生徒・進路指導に潜むトータリティの現代的問題について考察する。

ホールネス (wholeness) とトータリティ (totality)

アイデンティティとは, 社会の中で自分が～であるということについての「自覚, 自信, 自尊心 (誇り, プライド), 責任感, 使命感, 生きがい感」の総称のことであり (大野, 2010), ひとつのまとまりを示すものである。西平 (1993) によると, Erikson は「同じく一つのまとまり」を, その性格の違いから「wholeness」と「totality」として区別し, 次のように述べている。ホールネスとは, 「個々の, 互いに全く異なる各部分さえもが, 有効なまとまりをなし, ひとつの組織となるような各部分の集まり」 (西平, 1993, p254) のことである。「内部に矛盾を抱えつつも, 互いに排除することのない, 多様性と柔軟性に富んだ, しなやかで強靱なまとまり」 (Erikson, 1958/2002, p xiv) のことであり, さらには異質なものの同士が「発展的な相乗性 (progressive mutuality)」 (西平, 1993, p254) をもつような関係のことである。それに対してトータリティとは「絶対的な境界が強調された, 一個のゲシュタルト」 (西平, 1993, p254) であり, 「まったく排他的であると同時に絶対的に包括的なもののこと」 (Erikson, 1968/1982, p99) である (Figure1 参照)。

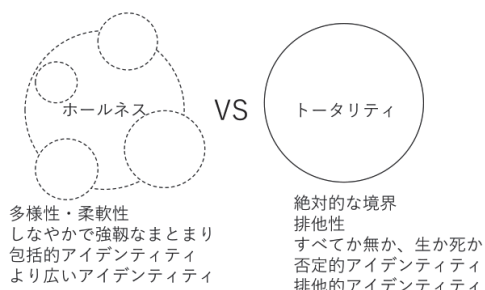


Figure1. アイデンティティのあり方

例えば作家芥川龍之介の遺稿には, さまざまな自分の側面の中から, あるひとつの役割をトータルに選ぼうとしつつも, それができないで苦しんでいるという記述がある。「僕はいつも僕一人ではない。息子, 亭主, 牡, 人生観上の現実主義者, 気質上のロマン主義者, 哲学上の懷疑主義者等, 等, 等, —それは格別差支えない。しかしその何人かの僕自身がいつも喧嘩 [けんか] するのに苦しんでいる。」 (芥川, 1927a, p82-83) と。つまり「僕は息子である」という役割をトータルに選択しようとする, 「僕は亭主である」という役割をトータルには果たせない。「僕は息子である」という役割に, 「僕は亭主である」, 「僕は牡である」といった役割が食い入ってくるのであろう。しかし多くの人は「息子であり亭主であり牡であり…哲学上の懷疑主義者である自分」というひとつのまとまりとして存在しており, それがホールネスの状態だといえる。時と場合によって臨機応変に優先されるものが変わってくるし, その位置づけや形そのものも変わってくるかもしれないが, それでもそれらは全て自分というひとつのまとまりとして存在している。一方芥川のトータリティは, 「僕は息子である」, 「僕は亭主である」, 「僕は牡である」, 「僕は人生観上の

現実主義者である」といった役割同士がお互いに食い入ることを許さない。そのため、それらがいつも喧嘩〔けんか〕するのに苦しんでいるのではないだろうか。

このようなトータルなアイデンティティのあり方は、アイデンティティの危機にともなう経験しやすいことを Erikson は指摘しているが、三好（2016）は三島由紀夫の事例を用いてトータリティに向かう無意識的な心理力動性がいかに強く、システムティックなものであるかを示した。Erikson は、人間が自分にとって本質的に重要なホールネスを失うと、トータリズムに頼ることによって自分自身と世界とを再構成しようとする（Erikson, 1968/1982）と述べている。深刻なアイデンティティ拡散に直面した際に人間は「アイデンティティを構成する諸断片のバラバラな束という矛盾した存在」（Erikson, 1968/1982, p109）にとどまることができず、トータリズムに頼ることによって、「性的・人種的・職業的・類型的な二者択一を、総合するのではなくむしろ対立させ、そして明確かつ全体的にどちらかの側につくことを決心するよう追い込まれてしまう」（Erikson, 1968/1982, p108）。したがってトータリティの問題は青年期だけの問題ではなく、自分のアイデンティティが問い直される際、アイデンティティが揺らぐ際にはいつでもトータリティに転化する可能性があると考えられる。

（a）友人関係におけるトータリティ

保坂・岡村（1986）は、学生相談における事例研究から友人グループがギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループの3つに分類されることを示し、青年期における友人グ

ループが発達的に変化することを示した。ギャング・グループはギャング・エイジにあたる児童期後半からみられる同性・同年齢・同地域の友人グループであり、大人から離れて自立的に、同じ行動をとることによって一体感を得るところに特徴がある。秘密、危険といった冒険の要素を含んだ遊びを共有する排他性・凝集性の高いグループであり、権威に対して反動的、他集団に対して対抗的である場合もある。それに対してチャム・グループは、思春期以降にみられる親密で排他的な同性のグループであり、メンバー同士の共通性や類似性を言葉によって確認し合うところに特徴がある。自分たちの興味関心などを、その集団内でしか通じない言葉によって共有することによって一体感を得るところに特徴がある。これらのグループはどちらもトータリティの状態にあるといえる。Erikson（1968/1982）は青年たちが派閥を作り、自分たちの理想や敵をステレオタイプ化し、皮膚の色、洋服、才能、好みなどの点でのトータルな二者択一により、集団でアイデンティティが拡散するのを防いでいると指摘している。内集団と外集団との間に絶対的な境界を設け、絶対的に排他的で包括的なトータリティの中でアイデンティティ拡散から身を守ろうとしているのではないだろうか。だからこそ中高生は、他人を排除するという点で、きわめて党派的で、不寛容で、残酷になりやすく（Erikson, 1968/1982）、異質なものに対して“いじめ”という形で向かうことがある。

ところがピア・グループになると、ギャング・グループやチャム・グループと同様に類似性や共通性が基盤にあるものの、メンバーの違いも

認識し、それを尊重しながら友人関係を深めることが特徴となる。青年期中期以降の男女混合のグループで、もはや同じことを求められることはなく、違いを通して自らの個性を発見していくためのグループであるともいえる。時間を忘れてお互いの価値観や将来を語り合い、時には意見がぶつかり合うこともあるが、それによって関係が崩れないグループであり、ホールネスの状態だといえる。このように友人グループはギャング・グループやチャム・グループといった排他性・凝集性の高いトータリティの状態から、互いに排除することのない、多様性と柔軟性に富んだ、しなやかで強靱なまとまりであるホールネスの状態へと発達していく。

しかしギャング・グループやチャム・グループの段階でみられるように、グループに同一化して自らのアイデンティティの危機を乗り越えようとするものの、そのトータリティゆえにグループに合わせることに疲れてしまう現象や他者をトータルに理解することができないために人に恐怖を感じる現象も報告されている(三好, 2014)。このような青年は、現代青年における友人関係のパターンとしては「対人関係を回避する群」(岡田, 2010)であり、対人関係を二者択一的に、トータルに切り捨て、友人関係を持たないことを選択しているのだと考えられる。

一方、他の2パターンである「傷つけ合うことを回避する群」と「群れて表面的に楽しい関係を維持する群」では、「キャラ」を介したコミュニケーションが多用されていることが指摘されている(cf. 瀬沼, 2007; 土井, 2009)。千島・村上(2015)はキャラがあることのメリットとし

て、「コミュニケーションの取りやすさ、存在感の獲得、理解のしやすさ」を、デメリットとして、「固定観念の形成、言動の制限、キャラへのとらわれ」を示した。そしてキャラを有する者は群れの的に友人と関わり、キャラが不明な者よりも友人関係に満足していたが、友人関係により一層気を遣っており、結果として友人関係満足感が低くなることが示された(千島・村上, 2015)。このように「キャラを演じる」、「キャラ疲れ」といった現代的な友人関係を示す言葉にも、その背後にはトータリティの存在がうかがえる。

つまり深刻なアイデンティティ拡散に直面した中高生は、「アイデンティティを構成する諸断片のバラバラな束という矛盾した存在」(Erikson, 1968/1982, p109)にとどまることができず、トータリズムに頼ることによってキャラを演じる場合があると考えられる。そしてSNS上では特に、「インスタ映え」する素材によって理想の自分(見せたい自分・なりたい自分)をトータルに演出することが可能となり、同時に、「いいね」が拡散しがちなアイデンティティを補強してくれる。このようにして、インターネット上の不特定多数の人に支えられ、トータルに理想の自分になることもできる。しかしそれが本当の自分であるわけではないため、一抹の焦燥感や虚しさはあるものの、トータリティによって一時的にはあるが安定すると考えられる。

(b) 親子関係におけるトータリティ

子どもにとって親子関係は誕生と同時に存在し、生涯にわたって続いていく中で相互に影響を与え合う共変関係(平石, 2010)にあり、特

に青年期は自立をめぐる葛藤が重要なテーマになってくる。平成25年度小学生・中学生の意識に関する調査（内閣府，2014）によると，9歳から15歳の小中学生にとって親はそれほど口うるさくもなく，反発も感じず，自分の気持ちをわかってくれる頼りになる存在だと認識されていることが示されている（Table1 参照）。平成18年の調査結果と比較しても，親子関係は良くなってきたといえる（池田，2017）。

Table1. 小中学校の親子関係についての意識（内閣府，2014）

	お父さん		お母さん	
	平成25(2014)年	平成18(2006)年	平成25(2014)年	平成18(2006)年
反発を感じる	27%	33%	27%	34%
頼りになる	91%	86%	94%	88%
自分の気持ちをわかってくれる	82%	67%	90%	82%
口うるさい	29%	35%	39%	50%

あてはまると回答した9歳から15歳の小中学生の割合

しかしながら「重大少年事件の実証的研究—親や家族を殺害した事例の分析を通して—」（裁判所職員総合研修所，2012）によると，少年による殺人事件は減少傾向にあるものの，親や家族・親族を被害者とする事件の割合は増加傾向にあるという。つまり一般的に現代青年の親子関係は良くなったといえるが，殺人事件に至るほどの親子関係も確かに存在しているのである。そしてその家族及び家族関係にみられる特徴として，次の5点があげられており，ここで取り上げられた15事例のすべてにおいて①～⑤の問題のいずれかが存在しており，多くの場合，重複していることが示された。

① 親などからの虐待（15事例中2事例）：精神面での深刻なダメージとなり，フラッシュバックに悩まされるなど情緒的な安定を欠いている。そして親に対する攻撃的な感情を内面に溜め込む。

② 親の養育態度の問題（15事例中9事例）：横暴・支配的，過干渉，愛情・情緒的交流に乏しい養育によって親への反発・嫌悪があり，親から愛されていない，親に受け入れられていないといった被害的な意識がある。さらに親に対する信頼感が乏しく，親を頼りにできない。

③ 父母間の不和・葛藤（15事例中9事例）：父母間の不和・葛藤によるストレスがあり，情緒的な安定を得られず，疎外感・孤立感を深めている。

④ 親の精神面の不調やアルコール・ギャンブル依存などによる生活困難な状況（15事例中5事例）：子どもの養育に十分な配慮ができない状況であり，さらに不安定な感情を子どもにぶつけている。

⑤ 少年のきょうだいの精神面の不調・家庭内暴力の存在（15事例中5事例）：そのきょうだいの精神面の不調等への対応に追われ，少年の養育に十分な配慮ができない傾向にある。

ここで取り上げられた15事例においては，親を殺すという重大事件を起こしたにもかかわらず，殺害の動機として「親に対する憎しみ」をあげる少年は多くない（裁判所職員総合研修所，2012）。「親に対する憎しみ」は，基本的に意識化されにくいところなのかもしれない。

近年，「毒になる親」（Forward，1989/1999），「母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き」（信田，2008），「母がしんどい」（田房，2012）といった著書が話題となり，共感を集めている。例えば「毒になる親」（Forward，1989/1999）の目次には，「「神様」のような親」，「コントロール

ばかりする親」,「残酷な言葉で傷つける親」といった見出しが並び、親の側のトータリティが垣間見える。「母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き」(信田, 2008) の内容紹介には,「「そんな結婚, 許さない」「ママの介護をするのは当然。娘なんだから」「私が死んだら墓守は頼んだよ」…。そんな期待に押しつぶされそうになりながら, 必死にいい娘を演じる女性たちがいる。それが「墓守娘」だ。」とあり,「いい娘キャラ」をトータルに演じるしかない女性たちの存在が見えてくる。さらに「母がしんどい」(田房, 2012)の帯には「私の人生はお母さんのものじゃない!」「母のこと, 大嫌いでもいいですか?」とあり, 子どもの人生を全面的に乗っ取り, 自分のものにしようとするトータルな母親がいることがわかる。親を悪くいうのは望ましくないという暗黙の共通認識からか, これまで意識化されてこなかった「親に対する憎しみ」が, 近年になってようやく話題に上るようになり始めたところなのかもしれない。

また単独で殺人を犯した少年の親の養育態度を調べていくと,「大人になりきれていない親」(原口, 2001) の存在が浮き彫りになってくる。具体的には自分の感情を子どもに直にぶつける自分本位で短絡的な親, 家族間の緊張や問題に直面することから逃げて子どもとのコミュニケーションも疎かにしている無責任で回避的な親, 自分を満足させている間は子どもを可愛がるが, 満足させなくなると子どもに当たり散らす自己中心的な親などである。そしてその少年ら10名のうち7名が, 殺人を敢行する前に自殺を試みたり, 周囲に自殺を相談しており, 死を考えるほど追い詰められた苦しい状況から生

きている実感がわからず, 人命を奪うことへのハードルが下がったのではないかという指摘があった(家庭裁判所調査官研修所, 2001)。「あたかも負けそうになったゲームをリセットするかのように, 過去の自分や否定したい自分を抹消しようとする」(家庭裁判所調査官研修所, 2001, p38) といった心理力動性もまたトータリティを示していると考えられる。Erikson は, 単なる大きさやスケジュールに由来する弱さは搾取されると隠れた憎しみを生み, 機会があればいつでも爆発しうる (Erikson, 1959/2011, p82) と述べているが, 少年の隠れた憎しみが親を含めた他者に向かうのか, 少年自身に向かうのかを予測することは困難である。「おれの人生は破滅だ。お前たちを道連れにして殺してやる。おれは犯罪者になって, その辺の人間を無差別に殺して, お前らを一生こまらせてやる」(本田, 1986, p32-33) という家庭内暴力の少年の言葉からも, トータルに自分の全人生を親への復讐に賭けている様子がうかがえる。

親に対して復讐的に, トータルに死を選択するケースは, 歴史上の人物の伝記資料において確認されている。例えば作家芥川龍之介は支配的に育てられた結果, 親の期待に応え, 都合の好い息子(奴隸), 道化人形として生きたことが指摘されている(三好, 2011)。そして主な養育者だった伯母に対してはアンビバレントな感情を抱いており,「僕の生涯を不幸にした人で無二の恩人」(佐藤, 1950, p345)と友人に語っていた。そして次のような遺書を遺して自殺している。「僕は養家に人となり, 我儘らしい我儘を言ったことはなかった。(というよりも寧ろ言い得なかった)のである。僕はこの養父母に

対する「孝行に似たもの」も後悔している。しかしこれも僕にとってはどうすることも出来なかったのである。) 今僕が自殺するのは一生に一度の我儘かも知れない」(芥川, 1927b, p84)。芥川は死の直前に、「自嘲 水洩や鼻の先だけ暮れ残る」という句を書いた短冊を伯母に渡し、「伯母さんこれを明日の朝下島さん【主治医】に渡してください、先生が来た時僕がまだ寝ているかもしれないが、寝ていたら、僕を起こさずにおいてそのまま、まだ寝ているからといって渡しておいて下さい」(森本, 1971, p345)と依頼している。このように、自分が死んで伯母がどんなに悲しむかを熟知しながら、初めて親に逆らい自分の意志で主導性を発揮したのが自殺だったと述べているのである。三島由紀夫もまた祖母、母親、父親それぞれに支配的に育てられた結果、復讐的に死を選択しようとする欲求があったことが示されている(三好, 2016)。「人生ははじめてから義務観念で私をしめつけた。義務の遂行が私にとって不可能であることがわかっていながら、人生は私を、義務不履行の故をもって責めさいなものであった。こんな人生に死で肩すかしを喰わせてやったら、さぞせいせいすることだろうと私には思われた」(三島, 1949, p268)。子どもにとって大人は絶対的な存在に見え、大人と子どもという圧倒的な力の差が存在する中で自分の人生を乗っ取った親に対して、全人生を失ってでも報復したい欲求の存在が示唆されている。

(c) 生徒—教師関係におけるトータリティ

特定の生徒の学力が向上する可能性が高いという期待を教師が抱くと、その生徒たちは実際に学力が向上することが示されている

が(Rosenthal & Jacobson, 1968), Chaiken, Sigler & Derlega (1974) は、そのようなときに教室で何が起きているかを観察した。その結果教師は、知能が高いと信じた生徒たちに対して頻繁に微笑みかけ、目を合わせる回数も多く、授業中の発言に対しても好意的な反応をより多く示しており、また、期待されている生徒たちも学校生活を楽しみ、失敗に対しても教師から前向きなアドバイスを得やすく、より向上しようと努力する傾向があることが示された(Chaiken et al., 1974)。つまり教師の期待が教師の行動に影響し、そのサインを生徒が実際に受け取り、それが生徒の自分自身への期待に影響するのである。Erikson はアイデンティティの感覚について「＜自分自身の内部の斉一性と連続性(心理学的な意味における自我)を維持する能力＞が＜他人にとってのその人がもつ意味の斉一性と連続性＞と調和するという確信から発生する」(Erikson, 1959/2011, p96)としているが、まさに教師の期待が生徒のアイデンティティ形成に影響するということが示されている。

このことは同時に、教師のもつ先入観や偏見が生徒に対してネガティブな影響を与える可能性も示しており、生徒の否定的アイデンティティ選択にも影響を及ぼすと考えられる。否定的アイデンティティとは、「どうせ私は～」とトータルに自分に対するネガティブな評価・確信をもち、社会的に忌み嫌われている価値に積極的にコミットし自己の拠り所を見出すというアイデンティティである。深刻なアイデンティティ拡散に直面した際に人間は「アイデンティティを構成する諸断片のバラバラな束という矛

盾した存在」(Erikson, 1968/1982, p109) にとどまることができず、たとえネガティブなものであっても何者かになろうとすることがあると Erikson は指摘している。このような否定的アイデンティティは決して青年の最終的な真のアイデンティティではなく、今、目の前にある物事に取り組むための一時的な代替の方法だといえる。そして Erikson は、教師や裁判官や精神病医が、そのような否定的アイデンティティを、青年の最終的なアイデンティティだと考えてしまうならば、青年は、自分のすべてを投入して、トータルに地域社会から嫌われるような人間になってしまうと警告している (Erikson, 1968/1982)。

また、教師の「理想の子ども像」と、個々の生徒とのズレが大きいほど、その生徒のスクールモラル（生徒が学校に対して抱く帰属感、愛着、親しみなど）が低く、学校に居づらさを感じていることが示されている（近藤，1994）。教師は授業・学級を運営するという観点から、能力の高さ、モチベーションの高さ、決まりの遵守といったことを中心として理想の生徒像を抱きがちである（市川，2011）。しかも教師自身が、トータルに自分の理想とするよい教師であとうとするとき、生徒にも理想の生徒像を強く要求することになる。そうしなければならぬほど、教師の抱く理想の生徒像とズレの大きい生徒の居場所はなくなってくる。Erikson は否定的アイデンティティの選択について、「適応、画一性、規格化を求める要求の増大がなければ、必ずしも必然的なものではない」（Erikson, 1968/1982, p269）ことを指摘しているが、そもそも社会がホールネスの状態を保ち、多様性

を受け入れ、適応、画一性、規格化を求めなければ、トータルに否定的アイデンティティを選択する意味もなくなるのである。つまり教師が生徒を、「私は教師であるという自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感」を脅かす存在としてとらえるとき、より強くトータルに理想の生徒像を要求するのではないだろうか。

1952 年から 2013 年までの間に生徒指導をきっかけとしたと考えられる自殺が 68 件（うち 5 件が未遂）起こっており、その存在を世間に広めるために 2007 年から「指導死」（大貫，2013）という言葉が用いられるようになった。「一般に「指導」と考えられている教員の行為により、子どもが精神的あるいは肉体的に追い詰められ、自殺すること」（大貫，2013, p4）を指す。したがって生徒指導本来の目的、すなわち「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高める」（文部科学省，2010, p1）という目的に沿った指導であれば、生徒が自殺するようなことは起こらないはずである。

なぜ指導死に至るほど精神的・肉体的に追い詰めるような指導をするのかについて考えてみると、ここにもトータリティが関わっていることがわかる。例えば生徒を力でトータルにコントロールしようとする場合、指導中、平然としているかのようにみえる生徒、反抗的な生徒は教師にとって脅威である。指導中に教員から目を見て話すように指導されたため、次に指導にあたった教員の目を見ていたところ「何を睨みつけているんだ」と怒られ、混乱した生徒は、遺書に次のように表現している。「先生たちに

おまえは反省していないだろうとか言われたが、自分自身どれだけ不思議だったことか。自分は泣いていたよ。心から。涙が出ないとダメですか？土下座しないとダメですか？死なないとダメですか？」（大貫，2013，p151）。この事例についての分析ではないが，一般的に教師が生徒に反省を求める場合，生徒の反省する気持ちと反抗する気持ちが10対0であれば（あるいはそれをトータルに演じれば），トータルに，全面的に反省しているように見えるだろう。しかし7対3のようなとき，教師から3の反抗心をしつこく指摘されると，生徒は自らの命を賭けて10対0であることを証明せざるを得なくなることがあるのではないだろうか。このように考えると，教育の現場では生徒のトータリティと教師のトータリティとが，ギリギリのところまでせめぎ合うような状況があるはずである。

おわりに

本論文では，アイデンティティ概念を理解する上で鍵となるホールネスとトータリティという観点から，中高生のアイデンティティ形成および生徒・進路指導に潜むトータリティの現代的問題について検討した。その結果，友人関係，親子関係，生徒—教師関係のいずれにおいてもトータリティが深く関わっていることが明らかになった。Erikson は否定的アイデンティティの選択について，「適応，画一性，規格化を求める要求の増大がなければ，必ずしも必然的なものではない」（Erikson, 1968/1982, p269）と述べているが，これは否定的アイデンティティ選択のメカニズムとしてのトータリティに言及しているのである。親が，学校が，教師が，社

会がホールネスの状態であれば，すべての生徒がそのまま受け入れられる状態であり，自分の全生命をかけて自分自身の尊厳をトータルに守ろうとする必要もなくなるのではないだろうか。しかしそのためには，親だけで完璧に対処できるものではなく，学校だけで完璧に対処できるものでもなく，社会全体が全ての人の人格を尊重しつつホールネスとして成立する必要がある。

ところが今のところまだ人種間・民族間の争い・偏見があり，男らしさ・女らしさにとらわれ，自分ではない何ものかになろうとして必死になるあまり，ストレスや葛藤を抱えそれをトータルに他者への攻撃として転化していないだろうか。親・教師の威厳を保つために，大人社会は中高生に対してトータルで，過度な要求をしていないだろうか。社会は青年たちの若さを不当に搾取していないだろうか。「人はアイデンティティを必要とする。にもかかわらず，そのアイデンティティが人を排他的にし，敵対関係を生んでしまう。Erikson は，アイデンティティという言葉によって，そうした絶望的なジレンマを問い続けた」（西平，2004，p6）。中高生はアイデンティティ拡散にともない，一時的な応急処置としてトータリティに頼りやすいものである。大人も中年期危機にともない，アイデンティティが問い直され揺らぎ，拡散しそうになる。にもかかわらずアイデンティティのあり方がトータリティに転化せず，ホールネスでありつづけるにはどうしたらよいのか。Erikson（1959/2011）は，たとえ人種・役割・年齢は違っても人間の価値は平等であるという経験を重ねることが，主導性を平和の内に育成し，本

当に自由な冒険心(エンタープライズ)を可能にすると述べている。ここにヒントがありそうだが、まずはアイデンティティのあり方について、ホールネスとトータリティの存在を知ることが必要だと考えられる。

引用文献

芥川 龍之介 (1927a). 僕は 芥川龍之介全集第14巻 岩波書店 pp.81-84.

芥川 龍之介 (1927b). 遺書 芥川龍之介全集第23巻 岩波書店 pp.84-87.

Chaiken, A., Sigler, E., & Derlega, V. (1974). Nonverbal mediators of teacher expectancy effects. *Journal of Personality and social Psychology*, 30, 144-149.

千島 雄太・村上 達也 (2015). 現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連 ―“キャラ”に対する考え方を中心に― 青年心理学研究, 26, 129-146.

土井 隆義 (2009). キャラ化する／される子どもたち―排除型社会における新たな人間像― 岩波書店

Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company.

(Erikson, E.H. 仁科 弥生(訳)(1977). 幼児期と社会1 みすず書房)

Erikson, E.H. (1958). *Young Man Luther: A Study in Psychoanalysis and History*. New York: W. W. Norton & Company.

(Erikson, E.H. 西平 直(訳)(2002). 青年ルター1 みすず書房)

Erikson, E.H. (1959). *Identity and life cycle*. New York: International Universities

Press.

(Erikson, E.H. 西平 直・中島 由恵(訳)(2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)

Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton & Company.

(Erikson, E.H. 岩瀬 庸理(訳)(1982). アイデンティティー青年と危機― 金沢文庫)

Forward, S. (1989). *Toxic parents: overcoming their hurtful legacy and reclaiming your life*. Bantam

(Forward, S. 玉置 悟(訳)(1999). 毒になる親 毎日新聞社)

原口 幹雄 (2001). 殺人を犯した少年の人格特性と親の養育態度―「重大少年事件の実証的研究」から― 日本家政学会誌, 52, 757-764.

平石 賢二 (2010). 青年期の親子関係 大野久(編) エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 pp.113-145.

本田 勝一 (1986). 子どもたちの復讐 朝日新聞社

保坂 亨・岡村 達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究, 4, 15-26.

市川 伸一 (2011). 現代心理学入門3 学習と教育の心理学 増補版 岩波書店

池田 幸恭 (2017). 青年期の親子関係 高坂康雅・池田 幸恭・三好 昭子(編) レクチャー 青年心理学 ―学んでほしい・教えてほしい青年心理学の15のテーマ― 風間書房 pp.79-94.

家庭裁判所調査官研修所 (2001). 重大少年

- 事件の実証的研究 司法協会
- 近藤 邦夫 (1994). 教師と子どもの関係づくり—学校の臨床心理学 東京大学出版会
- 三島 由紀夫 (1949). 仮面の告白 三島由紀夫全集：決定版 第1巻 新潮社 pp.173-364.
- 三好 昭子 (2011). 有能感の生成と、その後のアイデンティティに基づいた生産性についての伝記資料による比較分析：谷崎潤一郎と芥川龍之介の伝記資料を用いて 発達心理学研究, 22, 286-297.
- 三好 昭子 (2014). 全体主義が青年に及ぼす影響：否定的アイデンティティの観点から 帝京大学短期大学紀要, 34, 89-100.
- 三好 昭子 (2016). アイデンティティ理論におけるホールネスとトータリティ：生徒指導・進路指導におけるトータリティの問題 帝京大学短期大学紀要, 36, 115-130.
- 文部科学省 (2010). 生徒指導提要 教育図書
- 森本 修 (1971). 新考・芥川龍之介伝 北沢図書出版
- 内閣府 (2014). 平成25年度小学生・中学生の意識に関する調査 Retrieved from <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/junior/pdf/b2-1.pdf> (2016年12月16日閲覧)
- 西平 直 (1993). エリクソンの人間学 東京大学出版会
- 西平 直 (2004). エリクソン思想の本質 谷冬彦・宮下 一博 (編) さまよえる青少年の心—アイデンティティの病理—発達臨床心理学的考察 北大路書房 pp.4-8.
- 岡田 努 (2010). 青年期の友人関係と自己—現代青年の友人認知と自己の発達— 世界思想社
- 大野 久 (2010). 青年期のアイデンティティの発達 大野 久 (編) エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 pp.37-75.
- 大貫 隆志 (2013). 「指導死」追いつめられ、死を選んだ七人の子どもたち。 高文研
- Rosenthal, R. & Jacobson, L. (1968). *Pygmalion in the classroom: Teacher expectation and pupils' intellectual development*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 裁判所職員総合研修所 (2012). 重大少年事件の実証的研究—親や家族を殺害した事例の分析を通して 司法協会
- 佐藤 春夫 (1950). 芥川龍之介評伝 定本佐藤春夫全集第23巻 臨川書店 pp.345-348.
- 瀬沼 文彰 (2007). キャラ論 STUDIO CELLO
- 信田 さよ子 (2008). 母が重くてたまらない—墓守娘の嘆き 春秋社
- 田 房 永子 (2012). 母がしんどい KADOKAWA/ 中経出版